憎悪とその克服
Frankenstein を読み直す

野間　由梨花

はじめに

これまで *Frankenstein* はさまざまな観点から論じられてきた。しかし今、『フランケンシュタイン』を読み直した時、21 世紀を生きる私たちは本作品に何を読むことができるだろうか。そこで本発表では怪物へ向けられる憎悪と怪物が抱く憎悪を中心に、作品内に認められる憎悪の表象を整理することで、怪物とは何者かを再検討し、憎悪が行動に変化しない場合には、登場人物にどのような変化が見られるかを考察する。本発表は、『フランケンシュタイン』に表象される憎悪を考察し、新たな読みを提案する試みである。

『フランケンシュタイン』と法と犯罪

『フランケンシュタイン』における法や犯罪については、これまでにも議論されてきた。Marie Léger-St-Jean (2012)は、『フランケンシュタイン』を犯罪学的に読む試みをしている。彼女はその語りの手法から、Criminal biography の形を踏襲した物語として読めることを主張し、さらにフランケンシュタインと怪物の罪の告白を分析することで、本作品が 2 つの原因論を示していることを明らかにしている。1 つはフランケンシュタインの偏見が人相学的な考え方から生まれたものであるということだ。一方で社会から疎外されたことが、怪物が犯罪に手を染める原因となっていると彼女は主張する。社会からの疎外は憎悪の表象の 1 つである。Matthew Williams の *The Science of Hate* (2021)には、憎悪による犯罪を、犯罪学の立場から、科学的アプローチも用いることで検証している。偏見は憎悪の感情を構成する要素であり、それが暴力的な犯罪の起爆剤になる可能性を秘めている。そして、偏見は時に一つのカテゴリにおいて形成されるものではなく、いくつかのカテゴリを跨いで形成されることもある。怪物は幾重にも重なる偏見によって、社会から、そして生みの親であるフランケンシュタインから疎外されていたとも言えるだろう。

怪物の生い立ちが与える影響

生みの親であるフランケンシュタインは、怪物の醜さから責任放棄、育児放棄を選択し、みなしごとなった怪物が出会うド・ラセー一家は、怪物にとっていわば育ての親である。注目したいのは、親であるフランケンシュタインに捨てられてから、ド・ラセーらと出会い、彼らとの関係が破綻するまでの体験ある。怪物はド・ラセー一家に出会うまでに人々から偏見の目を向けられ、その経験は怪物の憎悪の感情を深める要素ともなっている。怪物の語りには人間との隔たりが明確に表現されているが、この対立は心理学的に「内集団と外集団」の対立であると言える。ウィリアムズによれば、この内集団と外集団の対立は、偏見がポジティブに働くかネガティブに働くかを決定づける重要な要素である。内集団であると認めることができれば、それを仲間であると認識し、ポジティブなステレオタイプが形成されるのに対して、外集団であることが認められれば、ネガティブなステレオタイプと結びつき、そこに偏見が生まれ、態度や思考に影響を与える。(*Science of Hate* 16)

本作品における登場人物のほとんどは、怪物を外集団に属するものと捉えていると言えるだろう。怪物はまさに「異なるもの」、憎悪を向ける対象として完全なのである。社会からの疎外という体験がトラウマとなり、最終的にこうしたトラウマが怪物の復讐心を掻き立て、怪物が罪を犯すきっかけとなっている。しかし、最終的な起爆剤となったのは、ド・ラセー一家との関係が破綻したことである。怪物とド・ラセー一家との関係は深く、怪物が“my beloved cottagers”(*Frankenstein* 95)と彼らのことを称するように、一方的ながらも強い愛情を抱いていることを読み取ることができる。しかし、怪物にとって人間の存在は、ド・ラセー一家と出会った当初にはすでに脅威となっており、トラウマとなる経験をしているのは明らかである。

> “What chiefly struck me was the gentle manners of these people; and I longed to join them, but dared not. I remembered too well the treatment I had suffered the night before from the barbarous villagers, and resolved, whatever course of conduct I might hereafter think it right to pursue, that for the present I would remain quietly in my hovel, watching, and endeavouring to discover the motives which influenced their actions.” (*Frankenstein* 82)

一方でこの引用からは、怪物がこれまでに出会った人間に反して、ド・ラセー一家に対してポジティブな感情を抱いていることも示している。怪物は人間に対する恐怖心を抱きながらも、一方的にド・ラセーらとの関係を深めていく中で、人間に対して抱いていた偏見や憎悪から解放される可能性も秘めていた。つまり怪物の中で、

ド・ラセーらは内集団であるという認識を持ち始め、偏見を行動に移すきっかけが抑制されていたと言えるのだ。こうした他者への理解を深めたのは怪物だけであり、ド・ラセーらを含む村人たちは怪物に対する理解を深めたわけではない。怪物は他者との関わりを持てないことによって、偏見を払拭する機会すら与えられず、同時に怪物の中にある人間に対する恐怖心も払拭できないままである。

憎悪の連鎖

怪物の抱いた人間に対するポジティブな感情は、怪物がド・ラセー一家に接触する動機づけとなる。このような感情が怪物の中で形成されるのは、彼らの日々の暮らしやその態度だけではなく、一家が置かれている状況を知ったことによる。彼らの過去は怪物に直接的な影響を及ぼさないものの、怪物が彼らに親しみを感じる要因となり、怪物がド・ラセーらを自分の内集団として捉え、怪物が人間に対する偏見を見直すきっかけになっている。同時にこうしたド・ラセー一家へ抱く感情を検討すると、怪物がどれほどド・ラセー一家に依存しているかが伺えるが、この依存が暴力的行為の起爆剤となったことは明らかだ。憎悪による犯罪の特徴は環境によるものだけではなく、個人の情緒の問題なのである。(*Science of Hate* 189) つまり、怪物の憎悪が行動に変化する際のトリガーイベントが起こった時に、怪物がその感情をどのように対処したかに問題があると言えるのだ。

怪物は己の醜さゆえに人間に避けられたり、攻撃されたりすることを理解しているため、そうした偏見を持たない盲目のド・ラセーに接触を図ることは、計画として非常に自然な流れである。視覚的な情報は偏見を形成する要素の一つであるからだ。怪物が人間に対して抱く恐怖心はこれまでの経験によるものだが、ド・ラセーらに対しては同じ人間の中でも安心感を得られる人たちであると怪物は信じている。しかし同時に、怪物の人間に対する偏見は消えたわけではない。怪物はフェリックスらの持つ偏見を払拭できず、その後もウィリアム殺害までの道中、怪物の期待はことごとく裏切られる。怪物はその生い立ちを知ることで、創造主であるフランケンシュタインやド・ラセーらに拒絶されたこと、彼らに対する深い喪失感によって、憎悪の感情を強めていった。怪物が体験した他者からの拒絶やそれによる喪失感は、ウィリアムが最初の犠牲者となる原因となる。

憎悪の克服

しかし、怪物には憎しみを行動に移す場合とそうでない場合が存在している。期待が裏切られ、ド・ラセー一家には逃げられ、怒りの矛先を向ける対象すら失ってしまった怪物であったが、怪物の中に渦巻く鬱蒼とした感情は、一家との絆、例えその絆は怪物により一方的にできたつながりであっても、そのつながりによって緩和されていることがわかる。怪物の成長過程を検討すれば、物語冒頭において怪物は憎悪を向けられる対象であったが、物語中盤からは憎悪を向ける登場人物となってしまった。しかし、怪物自身にも、その周りの環境にも、憎悪の連鎖を止める余地があったと言えるだろう。無意識的に「異なる」という理由によって、怪物を避け、罵り、時に暴力的に排除しようとする。異なる他者への理解を深めようとしなかったことが、最終的に怪物の憎悪を爆発させることとなり、フランケンシュタインにとって悲劇的な最後を迎えることとなってしまう。怪物の葛藤とその行動を考察すると、改めて憎悪の克服には完璧な形がないことに気づくのである。

おわりに

本作品においては、怪物を中心に憎悪の感情がどのように向けられているかを検討してきた。怪物の憎悪とそれによる行動は、突発的に発生したものではない。周囲の人間による怪物に対する憎悪によって引き起こされた行動が起因している。怪物がそうであったように、私たちは誰もが被害者にも、加害者にもなり得るのである。多様性が叫ばれる世の中において、アイデンティティを確立することも、他者を理解することも、正しい情報を得ることも、困難な時代である。『フランケンシュタイン』を読み直し、怪物に思いを馳せた時、私たちは未知との遭遇をした時に内面に生まれる憎悪との向き合い方を問い直すことができるだろう。怪物が誰でもない誰か、何でもない何かであるからこそ、私たちは怪物にその時代の課題を投影し、解釈しようとしているのである。

Bibliography

Léger-St-Jean, Marie. “A Portrait of the Monster as Criminal, or the Criminal as Outcast: Opposing Aetiologies of Crime in Mary Shelley’s Frankenstein”. *Romanticism and Victorianism on the Net.* No. 62, 2012. https://www.erudit.org/en/journals/ravon/2012-n62-ravon01483/1026003ar/. Accessed 6 Mar. 2024.

Shelley, Mary. *Frankenstein; or, The Modern Prometheus.* Edited by J. Paul Hunter. 2nd ed., W. W. Norton, 2012.

—. *Frankenstein; or, The Modern Prometheus.* Edited by Nora Crook, vol. 1, Routledge, 2016.

Williams, Matthew. *The Science of Hate*. Faber & Faber, 2021.